

信次の話を聞いているうちに胸の中にたまってきたうす黒い疑惑がだんだんその嵩を増し、もう口もとまでせり上がってきていた。吐き出さずにはいられなかったのだ。

「わしか。わしはそんなこと考えたことはない。露の目の前が一瞬、ぼつと明るくなった。

しかし、次の瞬間、

「お前に子ができんと思うたことはない。そんな女を嫁にした覚えは、わしにはないからのう。」

信次の口から氷のような言葉が、露をめぐらして飛んできた。

押さえつけたような、低い信次の声は、露の心臓をまっすぐに貫いた。

だがそれは、自分たちの子供を欲しがる信次の思いの強さゆえなのだ、と露は自分に言いかけた。

(けど……。ちよつと違う……)

否定するもう一人の露がいた。

(この人が子供、子供というのは、長山家の血筋を絶やさないうえにただけなんや)

『子も生めんような女を嫁にした覚えはない』と、恫喝的な圧力を持って言い放った信次の言葉が、露に、重たく、大きくのしかかった。

この家の当主となつてからの信次は、四代続いた長山家の大きな家霊に少しづつ押しつぶされ始めているのではないだろうか。

露は目まいを覚えた。覚えながらそれでも露はすわり直した。

夫の表情を見たいと思つた。だが、信次は腹ばいの背をいつまでも露に向けたままであつた。

まるで、自分の放つた言葉の効果を見定めて満足したように話を打ち切つた信次を、露は遠い人を見るような眼で眺めていた。

なぜ、信次は思い出したように子供の話を切り出したのだろうか。

それにしても、ひとひねりもふたひねりもした信次の言いようには、計算し尽された作為がどす黒く秘められているように露には思えた。

人間としてのゆとりを失っていく信次は、長山家の家霊の黒い手に連れ去られようとしてゐるのだ。

(この人を連れていかんといつて……。わたしのそばへおいといつて……)

露は、黒い手に向かつて心の中で叫んだ。

それにしても、かつての信次はこんな人ではなかつた。

夫に早く死別し、母子二人のくらしの中で娘を嫁がせ、一人暮らしをしているうちに死病にとりつかれた露の母を入院させ、その上、まだ健在だった長山の両親を説き伏せて費用一切の面倒を見たのは信次だったのである。

「たった一人のお母はんじや。露は心ゆくまで看病してあげたらええ。」

としきりに言った信次の優しさを、露は忘れてはいない。

「露。信次さんを大切にしてな。」

最後の日、そう言った母、フミの声もまだ露の耳の底にこびりついている。

あの頃の信次はいつたいどこへ行ってしまったのか。

ぺたりと布団の上ですわりこんだまま、向うむきに横たわって寝息を立て始めた信次の背中に露はいつまでも虚ろな視線を向けていた。

目の前の信次の寝姿が、次第に遠ざかり、小さ

くなり、やがて黒点となって消えて行くようなかなさが、露を包みこんでいた。

子を生むのは家のためであり、もし子を生むことのできなかつた女は、婚家から一方的に離縁されても文句は言えない。

現代からは想像もつかないこうした非人間的な考え方が、つい六、七十年前の日本にはまだ厳然と根づいていたのである。

封建社会の尻尾が、まだくっついていてる時代ゆえの男と女の苦悩であつたといえよう。

村のはずれの子授け地蔵に、ひそかに通う露の姿が見られるようになった。

朝の早い農家さえもまだ目ざめない明け方と、それから、田畑に働く人たちが引き上げて、星がまたたき始めた宵と、小走りに、顔をうつ向けて子授け地蔵へ急ぎ、拜殿の前で長い間、ぬかづ

いている露の姿を見たのは、空の月と星とだけであつた。

大正十五年十二月二十五日、天皇が崩御し、年号は昭和と改められた。

わずか十五年の短かい大正時代であつたが、大正デモクラシーのろしをかかげ、一方では、世界大戦と関東大震災によって、経済の混乱と発展を招いた時代でもあつた。

香川県でも多くの町や村に電灯がつき、電車が走り、一部では電話さえも通じるようになった。新しい文明の波が地方へも打ち寄せてきたのである。

だが、底辺の庶民の生活には、さして大きな変化は見られなかつた。

ただひたすらに働くことだけが、庶民に与えられた唯一の生活形態なのであつた。

昭和元年はわずか六日間で幕を閉じ、新しい年が明けると、早や昭和二年となつた。

香東川を渡ってくる風が凍るように冷たく、三寒四温どころか、寒い日ばかりが明けても暮れでも続いた。

最近、信次の帰宅は毎日遅かった。酒には弱い  
たちのはずなのに、したたかに酔って帰ることも  
珍しくなかった。

露は、信次の自転車のきしむ音が聞こえてくる  
まで帯を解いたことはなかった。

どんな夜更けでも帰ってきた信次に熱い茶を  
入れ、風呂を沸かし直し、寢床には行火を入れて  
信次が快く眠りにつけるように気を配った。

ましてや、帰宅が遅いことについて、不平がま  
しい言葉などを吐いたことは一度もなかった。

髪一すじも乱さず、きちんとした昼の身じまい  
のまま出迎える露に、信次は大ていの場合、ただ  
黙って一瞥を与えるだけであった。

信次は日々荒んでくるように見えた。  
信次の内部の鬱屈が、何によるものであるか、  
露にはわかってはいるだけに、針のむしろに坐って  
いるような辛さにさいなまれた。

だが、どうするという手だても、露には浮かば  
なかった。

次第に自分から遠ざかっていく信次を引きとめ  
るためには、今はただひたすら尽くすしかない  
心に決めた。信次の心を昔に戻すためならば、  
どれほど尽くし抜いても悔いはなかった。

しかし、やはり、子供が欲しかった。  
(子供さえ生まれたら……)  
すべては良い方へ転換するのだ。子供に拘泥し

ている信次も、苦しい妻の座に耐えている自分も  
救われる。露はひたすら祈った。

子授け地蔵への日参が、百度参りに変わり、寒さ  
に凍えながら、百度を踏む露の姿が夜明けの  
境内や、夕暮れの社前に見られた。

露はどんなことがあっても離別だけはされたく  
なかったのである。

嫁いできたその日から、自分の家はこの長山家  
しかない、と思いこんできた。第一、露には、離別  
されても帰るところがなかった。

たった一人の肉親であった母のフミはもうい  
ないのだ。  
女は三界に家なし、といった観念が人々の

頭の中に根を下ろしている時代であった。離別  
されて戻った女に対する世間の眼は冷たく、そ  
れを跳ね返して自活しようにも、まだまだ女に  
開かれた職業の門戸は狭かった。

何としてでも、この長山家の主婦としての座を、  
露は確立しなければならなかったのである。

そのためならば、茨の褥も、針のむしろにも、  
耐えていこうと、露は自分自身に強く言いかけ  
た。

二月にはいつて寒が明けると、さすがに大気に  
春の匂いが感じられるようになった。

庭のすみにふきのとうを見つけた朝は嬉しか

つた。自分がまっ先に見つけた春。何かいいことがありそうな気がした。

そつと指先で掘り起こし、朝の味噌汁の実に浮かしてみた。ほろ苦い味わいが、春を呼ぶような思いを誘った。

信次は、黙々とふきのとうの浮いた味噌汁をすすり、出勤の支度をする、いつものように、外へ出た。

自転車の信次の後姿に、

「お早ようお帰り…」

と、声をかけ、遠ざかっていくその怒り肩の背を見送ると、露は、長い吐息をついた。

一直線に伸びた街道をふちどるように、枯草

が茂り、その上においた霜は、銀色の粉をふりまいたように朝日に輝いていた。

一度もふり返ることなく、ペダルを踏み続けていく信次は、街道から横道にふつと曲ると、それっきり見えなくなってしまう。

露は信次の消えたあたりに視線をとどめたまま、いつまでも、ぼんやりと突っ立っていた。

長山家の小作の一人である秋山修造が訪ねて

きたのは、早春の風花が舞う日曜の夕暮れどきであった。

四十を出たばかりのはずなのに、修造は顔中に皺を刻みこんでいた。五分刈りの頭にも白い

ものが半分程まじり、身体を伸ばし切ることなどといったいあるのだろうか、と思う程、いつ見ても小腰をかがめた恰好で動いている男であった。玄関に出た露に修造は、人の好きそうな眼の色をさらに柔げて、

「旦那さんはおいでかいの。わし、折り入ってお

願いがあって…」

と聞いた。

(以上2月3日放送分)